

わが国の高等学校の「体育に関する学科」についての一考察

A study of high school physical education department in Japan

1K07B227-0 吉川みなみ

指導教員 主査 友添秀則先生 副査 宮内孝知先生

【本研究の動機】

私は幼い頃から運動することが好きで、中学校からは部活動で陸上競技を行うようになった。しかし、出身中学校は部活動が盛んではなかったため、高等学校（以下、「高校」と略す）は部活動の盛んな学校に進学したいと思い、保健体育科のあるスポーツの強豪校に進学を決めた。

出身高校には普通科と保健体育科があり、それぞれ異なったカリキュラムが組まれている。保健体育科には普通科にはない「体育理論」という授業や各学年で行われる「校外実習」などがあり、各々が「専攻」という形で競技を行う。クラスの40人全員が専攻を持って競技に取り組んでいたため、お互いに刺激し合って真剣に競技に臨むことができ、中学校の頃に思い描いた高校生活を送ることができた。そして、この保健体育科には、教員も生徒も非常に熱心な人が多く、授業や専攻、校外実習などを通して、たくさんの素晴らしい経験をし、かけがえのない仲間を作ることができた。

しかし、私は高校在学中から保健体育科について疑問を感じていた。夢にまで見た憧れの学校で素晴らしい仲間と指導者に囲まれ、最高の学校生活を送ることができたと思う反面、保健体育科なのに体育やスポーツについて深く学んだという感覚がまったくなかったのである。そして、その疑問は大学に入学して更になくなった。3年間、体育やスポーツを専門として学んできたはずなのに、大学の授業で聞く内容は初めて耳にするものばかりで、普通科の高校を卒業して大学から体育やスポーツを学ぶ他の学生と自分は同等程度の知識しか持っていないのではないかと感じたのである。これが本研究の直接的な動機であるが、それに加え教科体育との比較や現在の保健体育科の問題点なども挙げ、これからの「体育に関する学科」（以下、「体育科」と略す）の在り方について考えたいと考えた。

【本研究の方法】

研究方法は文献資料を用いたものとする。第1章では、体育科

が誕生した昭和20年代の教育や体育・スポーツの状況に関する文献を検討し、第2章では戦後公布された学習指導要領を中心に検討を加えていく。第3章では教科体育との比較や学習指導要領から見た体育科の問題点を挙げ、今後の在り方について考察していく。

【各章の概要】

＜第1章 終戦から高等学校「体育に関する学科」の設立まで＞

第1章では、体育科が設置された背景について、戦後の社会状況や「学校体育指導要綱」をもとに明らかにし、また、日本で初めて体育科を併設した駒場高校の当時の状況から、体育科設置に至った経緯を明らかにした。戦後、占領軍の働きにより教育は急速に民主化し、体育はスポーツが中心的教材となっていく。そして、心身ともに健康で明朗な青少年を育成するべく日本で初めて駒場高校に体育科ができたのである。

＜第2章 科目体育と体育科の学習指導要領の変遷＞

第2章では、1951（昭和26）年から2010（平成22）年現在の学習指導要領をもとに、戦後、日本でどのような体育教育がなされてきたかを明らかにした。また、学習指導要領をもとに、普通教育としての科目体育と専門教育としての体育科との違いを示した。

＜第3章 今後の体育科について＞

第3章では、第2章の内容を受けて、これまでの体育科の問題点について述べた。また、2013（平成25）年の入学生から年次進形で実施される新しい学習指導要領の改訂内容を示し、科目体育・体育科がどのように変わったか述べた。そして、それらを踏まえ、今後の体育科の在り方について提言をした。